

【技術分類】 1 - 3 - 4 織物 / 色糸の付加 / 錦

【技術名称】 1 - 3 - 4 - 1 経錦

【技術内容】

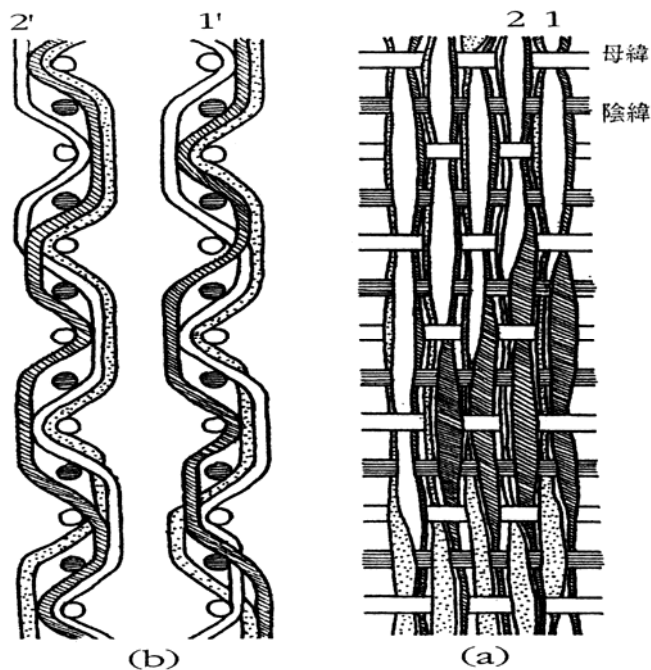
複数の色糸を一組として1本の糸のようにして使い、必要とする色の糸を表面に浮かせて文様を表わす絹織物を「錦」という。経錦（たてにしき）は、そのようにして経糸で地と文様を織り出した織物である。通常は3色3本の経糸による三重経だが、五重経、六重経のものもある。

色糸を表に出させるために母緯（おもぬき）と呼ばれる緯糸を一段、他の色糸を沈めるための陰緯（かげぬき）と呼ばれる緯糸を一段、交互に通す。また、あらかじめ機台に掛けられた経糸によって文様の色が決定されてしまう不自由さがあり、それを補うために、経縞状に経糸の色を替える方法がしばしばとられる。経錦の組織を図1に示す。

経錦の作例は、日本では法隆寺や正倉院の遺品にみられる（図2）。奈良時代以降はほとんど製作されていないが、現在は正倉院裂の復元をした裂地が織られている。

【図】

図1 経錦の組織



出典：「北村武資 織の美」、2001年、鶴見香織著、群馬県近代美術館編集、「人間国宝 北村武資 織の美」展制作実行委員会発行、69頁 図12 経錦図解（註：「佐々木信三郎著『新修 日本上代織 技の研究』掲載の図に、必要な改変を加えて作図したものである。」）

図2 経錦の例（「蜀江錦帯」）



出典：「染と織の鑑賞基礎知識」、1998年6月20日、小笠原小枝著、至文堂発行、26頁 図25 蜀江錦帯（法隆寺献納宝物 東京国立博物館）

【出典 / 参考資料】

「北村武資 織の美」、2001年、鶴見香織著、群馬県近代美術館編集、「人間国宝 北村武資 織の美」展制作実行委員会発行

「染と織の鑑賞基礎知識」、1998年6月20日、小笠原小枝著、至文堂発行

「きものと裂のことば案内」、2005年4月20日、長崎巖著、株式会社小学館発行

「日本染織発達史 改訂増補版」、1968年、角山幸洋著、田畑書店発行

【技術分類】 1 - 3 - 4 織物 / 色系の付加 / 錦

【技術名称】 1 - 3 - 4 - 2 緯錦

【技術内容】

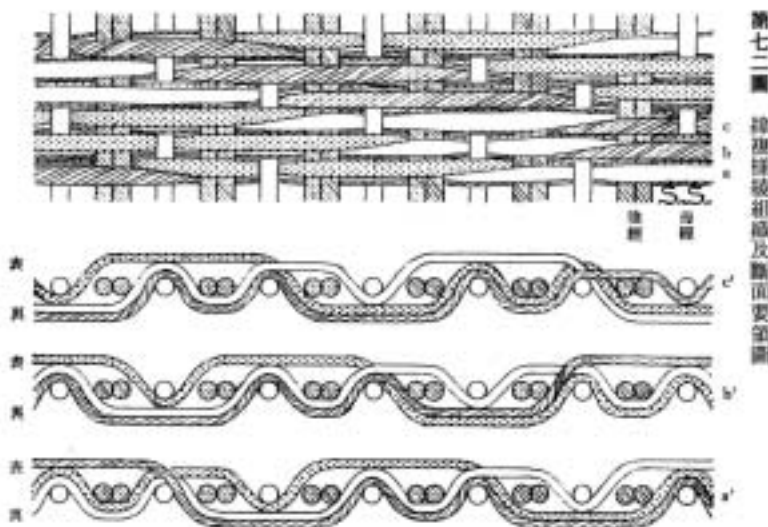
複数の色系を一組として1本の糸のようにして使い、必要とする色の糸を表面に浮かせて文様を表わす絹織物を「錦」という。緯錦（よこにしき、ぬきにしき）は、そのようにして緯糸（絵緯=えぬき）で地と文様を織り出した織物である。製織工程で色系を替えていくことが自在なため、経錦より豊かな表現ができ、大きな模様を作ることもできる。

組織は綾織が代表的で平織は少ない。色系を表に出させるために、母経（おもだて）と呼ばれる経糸と、他の色系を沈めるための陰経（かげだて）と呼ばれる経糸が交互に使われる。また、表裏とも別撚み糸で絵緯を押さえた「糸錦」は、錦地の代表といわれている。綾組織の緯錦の構造を図1に、平組織の緯錦の構造を図2に示す。

緯錦は経錦のあとに出現したが、経錦より文様作成の点で優れる緯錦が主流になった。現在も帯地などが、西陣や桐生でジャカード機を用いて生産されている。緯錦の帯地を図3に示す。

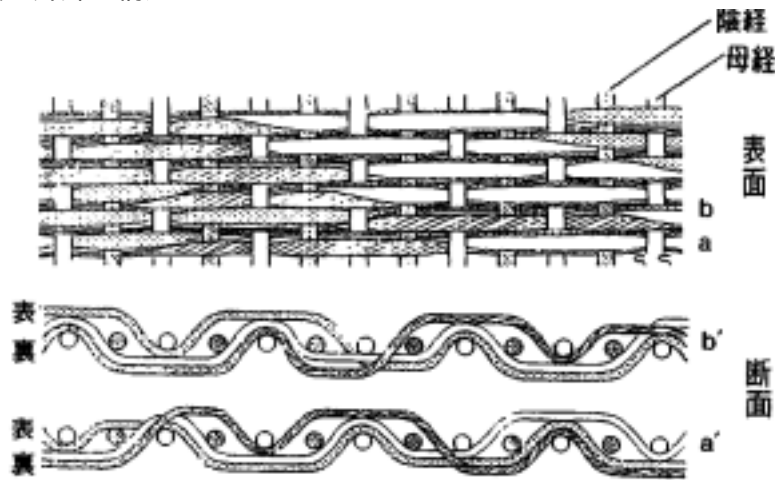
【図】

図1 綾組織の緯錦の構造



出典：「日本上代織技の研究」、1976年7月10日、佐々木信三郎著、川島織物研究所発行、111頁 第七二圖 緯複様綾組織及断面要領圖

図2 平組織の緯錦の構造



出典：「やさしい科学 絹の知識百科」、川口浩著、1991年6月15日、染織と生活社発行、176頁 図3 緯錦複様平組織の表面及び断面（断面は表面図の下方向から見た場合）「川島織物研究所報告」第2報、日本上代織技の研究より

図3 緯錦の帯地



出典：「西陣 Web / 西陣織について / 伝統的工芸品西陣織の品種」、西陣織工業組合ホームページ、3.緯錦、2005年11月11日検索、<http://www.nishijin.or.jp/ori/kind.html>

【出典 / 参考資料】

- 「日本上代織技の研究」、1976年7月10日、佐々木信三郎著、川島織物研究所発行
- 「やさしい科学 絹の知識百科」、川口浩著、1991年6月15日、染織と生活社発行
- 「染と織の鑑賞基礎知識」、1998年6月20日、小笠原小枝著、至文堂発行
- 「西陣 Web / 西陣織について / 伝統的工芸品西陣織の品種」、西陣織工業組合ホームページ、2005年11月11日検索、<http://www.nishijin.or.jp/ori/kind.html>
- 「伝統的工芸品 西陣織（パンフレット）」、西陣織工業組合発行
- 「伝統的工芸品 桐生織（パンフレット）」、桐生市繊維振興協会・桐生織物協同組合・桐生織伝統工芸士会発行

【技術分類】 1 - 3 - 4 織物 / 色糸の付加 / 錦

【技術名称】 1 - 3 - 4 - 3 綴織

【技術内容】

綴織は、何色もの緯糸を必要部分だけで折り返しながら通していく平織の織物で、色の境目に「把釣（はつり）孔」という隙間ができるのが特徴である。経糸を粗く張り、緯糸で経糸を包み込むようにして織るため、織物の表面には経糸が見えない。図1に綴織の構造を示す。

製織はすべて手作業で、模様の部分は何十本もの小ぶりの杼で経糸を数本すくっては緯糸を入れ、織り手の爪（鋸状にギザギザが刻まれている）で緯糸を挿き寄せて織る。模様のない部分は手投げ杼を使って緯糸を通し箆を打ち込む。織っているときに上になっている面が織物の裏になる。綴織の作業（写真）を図2に示す。

生産地は古くから世界各所にある。エジプトでは3～10世紀にかけて「コプト織」（経糸に麻糸、緯糸に染色した羊毛）が発達、中国では唐・宋代に「刻糸（こくし）」（絹糸）が発展した。他にもヨーロッパの「ゴブラン織」（経糸に亜麻、緯糸に毛糸）、インドの「カシミア織」（毛糸）、ミャンマーの「アチェイク」などがあり、タイ、北米、ペルーにもそれぞれ独自の綴織が発達している。

【図】

図1 綴織の構造

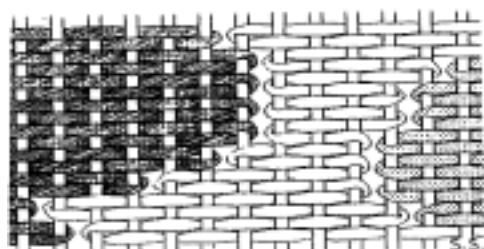


図4-1 綴織の構造

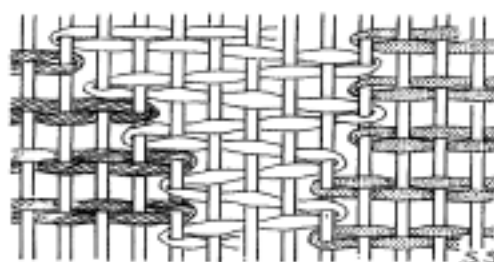


図4-2 綴織の構造(重ねつなぎ)



図4-3 綴織の構造(絡みつなぎ)

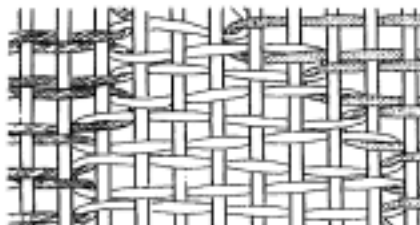


図4-4 綴織の構造(絡みつなぎ)

出典：「やさしい科学 絹の知識百科」、川口浩著、1991年6月15日、染織と生活社発行、172頁 図4-1 綴織の構造、図4-2 綴織の構造（重ねつなぎ）、図4-3 綴織の構造（絡みつなぎ）、図4-4 綴織の構造（絡みつなぎ） 「川島織物研究報告」第2報、日本上代織技の研究より

図2 綴織の織り方



出典：「伝統的工芸品 西陣織（パンフレット）」、西陣織工業組合発行、1頁

【出典／参考資料】

「やさしい科学 絹の知識百科」、川口浩著、1991年6月15日、染織と生活社発行

「染と織の鑑賞基礎知識」、1998年6月20日、小笠原小枝著、至文堂発行

「伝統的工芸品 西陣織（パンフレット）」、西陣織工業組合発行

「染め織りめぐり」、2002年11月1日、木村孝監修、JTB発行

「原色染織大辞典」、1977年6月6日、板倉寿郎、野村喜八、元井能、吉川清兵衛、吉田光邦監修、株式会社淡交社発行

【技術分類】 1 - 3 - 4 織物 / 色糸の付加 / 錦

【技術名称】 1 - 3 - 4 - 4 繡珍（朱珍）

【技術内容】

繡珍は、繡子織（繡子織の項参照）の地に何色かの緯糸（絵緯 = えぬき）を加えて文様を表わした絹織物である。組織点が少ないため、なめらかで艶がある。五枚繡子が多いが、八枚繡子の作品もある。高級品には色糸とともに金糸が織り込まれる。

日本には室町時代末に中国から伝わり、江戸時代以降、さかんに製作されるようになった。江戸時代は、文様を織り出す緯糸を浮かした状態にしているが、明治以降は、地の経糸とは別の経糸（搦み経 = からみだて）で文様の緯糸を押さえることが多い。繡珍の例を図 1 に示す。

【図】

図 1 繡珍の例



出典：「西陣 Web / 西陣織について / 伝統的工芸品西陣織の品種」、西陣織工業組合ホームページ、5.朱珍、2005 年 11 月 11 日検索、<http://www.nishijin.or.jp/ori/kind.html>

【出典 / 参考資料】

「西陣 Web / 西陣織について / 伝統的工芸品西陣織の品種」、西陣織工業組合ホームページ、2005 年 11 月 11 日検索、<http://www.nishijin.or.jp/ori/kind.html>

「伝統的工芸品 西陣織（パンフレット）」、西陣織工業組合発行

「染と織の鑑賞基礎知識」、1998 年 6 月 20 日、小笠原小枝著、至文堂発行

【技術分類】 1 - 3 - 4 織物 / 色系の付加 / 錦

【技術名称】 1 - 3 - 4 - 5 佐賀錦

【技術内容】

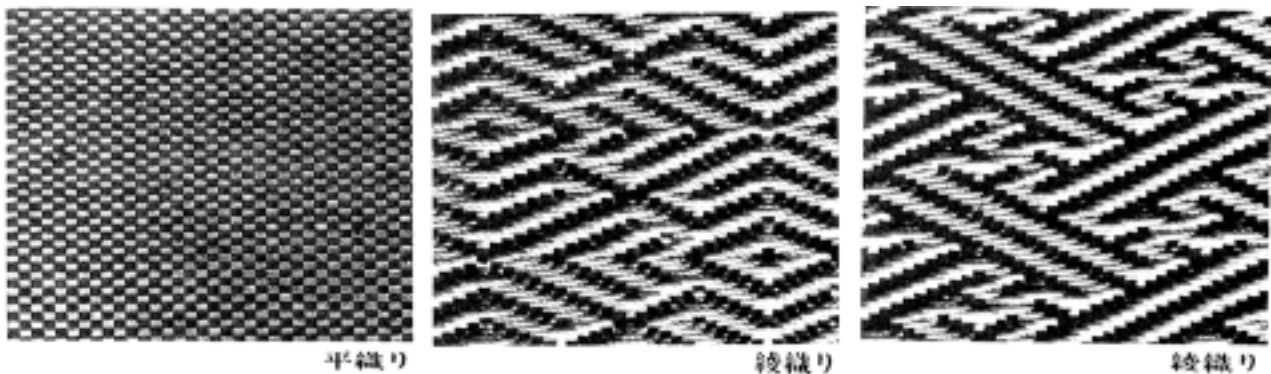
佐賀錦は、経糸に箔紙を使った織物である。経糸にする箔紙には、和紙に金箔・銀箔を漆で接着したものをを用いるのが基本だが、柄のある和紙や漆（黒、白、朱、グレー、グリーン）の和紙を使うこともある。この箔紙を幅一寸あたり 20～60 分割して裁断したものを経紙という。緯糸には、60 色ぐらいある佐賀錦用の絹糸、金糸、銀糸、五色糸を用いる。

組織は綾織が基本で平織もある（図 1）。製織には専用の織り台を使用する。ヘラで経紙を一目おきに拾い、上下に開かれた経紙の間に緯糸を通す。緯糸は網針（あばり）に巻いて使う。緯糸を右から左に通したらヘラを引き抜き、さきほどとは逆に経紙を拾って左から右に網針を通し、ヘラを引き抜いて緯糸を軽く打ち込む。平織の場合、箆を用いて作業の合理化を図る。佐賀錦の道具を図 2 に、織り方を図 3 に示す。

文様としては網代、紗綾形、菱紋など数十種類あり、斜めの織線が連なるものが多い。手織り技術者の減少により、帯締めや袋物などの小物の製品が多くなり、帯などは希少品となっている。

【図】

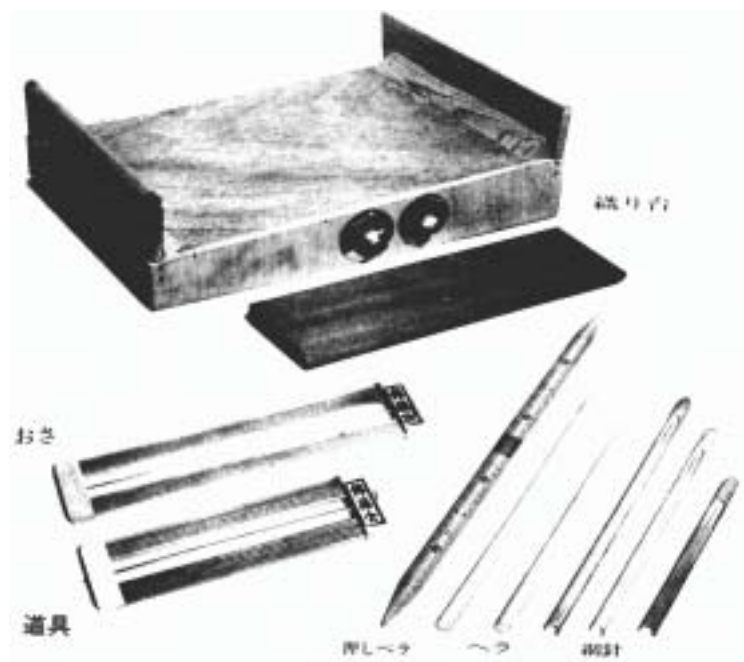
図 1 佐賀錦の織り目



出典：「新技法シリーズ 佐賀錦入門」、1978 年 4 月、俵藤照著、美術出版社発行、22 頁 平織り、綾織り、綾織り



図2 佐賀錦の道具



出典：「新技法シリーズ 佐賀錦入門」、1978年4月、依藤照著、美術出版社発行、23頁 道具

図3 佐賀錦の織り方

出典：「新技法シリーズ 佐賀錦入門」、1978年4月、依藤照著、美術出版社発行、30頁 10ヘラを立て枠口を作り、リリヤンをつけた網針を通します。

【出典／参考資料】

「新技法シリーズ 佐賀錦入門」、1978年4月、依藤照著、美術出版社発行

「博多織と佐賀錦 日本の染織・別巻3」、1979年3月、中江克己企画編集、泰流社発行